

生研の新営・移転の 20 年

村 上 周 三*

東京大学生産技術研究所（以下生研）が西千葉から六本木に移転したのは1962年（昭和37年）のことである。“もはや戦後ではない”という戦後復興期の著名なコピーが既に廃れた頃であったが、生研の戦後はある意味でこの時に改めて始まったと言ってよい。旧兵舎という由来を持つ古びた建物を見て新営に思いを馳せない人はいなかったはずであり、生研の新営計画のスタートは気持ちの上で六本木に立地した時であると言える。但し新営計画が実現を視野に入れて具体的に動き出したのは、それから丁度20年後の1982年（昭和57年）のことである。この年、六本木の敷地・庁舎が大蔵省から東大に移管されている。今から言えば新営についても、移転についても、1982年は鍵となる年であった。

最初の新営計画の作業が始まってから既に約20年以上が経過している。この20年の間に、東大総長の交代が5回、生研所長の交代は8回を数える。生研という1つの組織が、研究基盤の充実の必要性を念じて庁舎新営という大きな目的に向かって長期的努力を続け、さまざまな困難を乗り越えて無事目標に辿りつきつつある。長期にわたり一貫した姿勢で新営を追求した生研の組織運営は特筆に値するものである。同時に科学技術振興の重要性を認識して、新営を長期的に支援された学外・学内の多くの関係者の御理解、御支援も忘れることはできない。

最初の新営案は1970年代の終わりから80年代の初め、武藤所長（当時：以下同じ）、田中所長の時代に建築家の故池辺教授を中心として練られたもので、六本木庁舎の中庭に高層建物を2棟建てるという案であった。当初は、新営という言葉はあっても移転ということは意識されていなかった。この時の計画は、六本木の敷地が東大の所管でなかったため、計画案作製の段階で止まり、それ以上の進展はなかった。石原所長の時代に六本木の敷地が東大の所管になったが、これを契機に高梨教授や原教授を中心に新営のための容積算定を含む具体的な調査が行われ、建物模型の提案がなされた。次の尾上所長の時代に、今度は駒場Ⅱキャンパスへの移転要請という形で新営問題が浮上した。検討に急を要したため夏休みに臨時教授総会を開いて駒場Ⅱへの移転問題を審議したほどである。当時は西千葉から六本木への移転の際の経験、教訓等が未だ色濃く残っており、生研サイドにおいて移転に対してやや警戒心を抱く雰囲気強く、この時は移転なしという結論になった。1985

年頃のことである。しかし、駒場Ⅱへの移転を迫る外圧（或いは神風か？）はこれで終了したわけではなかった。

その後、バブル経済が進展し東京への一極集中が大きな社会問題となり、これに関連する形で公的機関の都心立地の是非が議論される機会が多くなった。東京大学でも将来の発展を模索しながら長期的なキャンパスのあり方に関して検討がなされた。これに連動して、生研の六本木からの移転を迫る圧力が学内、学外から徐々に強くなってきた。六本木からの移転を迫る圧力はもともと存在したが、当時の地価狂騰の折から、六本木の土地処分により大学再整備のための十分な余剰資金が得られるのではないかという思惑があったことは否定できない。

増子所長、岡田所長や建築家の原教授を中心に、池辺案に続く六本木での二つ目の新営案が作られたのは1990年前後の頃である。当時の生研の意志は、あくまで六本木キャンパスにおける新営であり、この時の計画には六本木からの移転を迫る外圧に対して六本木での新営を主張する生研サイドの姿勢を明確にするという目的も込められていた。森総長の後を継いだ有馬総長の時代には、本郷、駒場に続いて第3のキャンパスの獲得計画が学内で真剣に議論されるようになり、いわゆる三極構造という形の東京大学の将来計画が1992年（平成4年）評議会において承認された。これに対応して、生研でも岡田所長、原島所長のリーダーシップの下に、新営・移転問題について熱のこもった審議がなされた。また駒場Ⅱへの移転に関して、先に立地している先端研究センターとも多くの協議を重ねた。最終的に原島所長の任期の最後の時期に、三局構造の趣旨に賛同して東京大学全体の発展のために駒場Ⅱキャンパスへ移転するという生研サイドの意志が決定され、当時の吉川総長と移転に関して最終的な合意がなされた。この合意にこぎつけるまでに歴代所長をはじめ多くの生研教員が払った労力は莫大なるものであったが、これを支えたのは日本の科学技術の一層の発展を図るためには、研究基盤の充実が不可欠であると信じて頑張った所員の情熱であった。同時に日本の科学技術の発展における生研の貢献の大きさを評価して、その研究施設の改善に支援を惜しまなかった文部省、東大本部をはじめ関係各位の努力も大であった。

鈴木（基之）所長の時代に入ると、建築家の原教授を中心に駒場Ⅱキャンパスにおける具体的な建物設計が進められた。建築設計に際しては本部施設部からも全面的な御協

力を得た。

バブル経済がはじけた後、ここ数年日本は未曾有の不況に見舞われている。景気浮揚のため公的資金の導入がさまざまな形でなされたが、この恩恵は大学の施設改善にも及び、生研の新営も予想外のスピードで進行している。私自身は、内心新営建物がある程度まとまった形で実現するのは何年先かわからないという予想を抱いていた。六本木と駒場における長期にわたる2局運営は避けられないものと腹を括り、そしてそのための対策を練っていた所であった。現在の新営計画の順調な進行は、神風が吹いたとしか表現できないというのが正直な気持ちである。

新営、移転はまだ完成していないが、終点が近づいているというのが率直な感想である。生研にとっては研究所の存立に関わる大事業であった。長期にわたって新営を支援していただいた文部省、東大本部の方々をはじめ多くの関係各位、またこれを推進した生研の教職員各位に深甚なる

謝意を表する次第である。新しい庁舎は21世紀の科学技術研究をリードすることのできる立派な研究施設である。研究所の新営は大きな投資を必要とするものであり、我々はこのような多額の資金を用いて建設された水準の高い研究施設を利用することの幸せを感謝すると同時にその責任の重さを十分に認識する必要がある。この責任感をバネに生研の一層の発展を図り、世界の科学技術の進歩に大きな貢献を果たすことがこれに応える最善の道であると考え

(追記 小生のあいまいな記憶を頼って書きましたので、充分正確に事実を把握していないところもあります。内容に誤りがありました時は御容赦下さい。)

*第5部教授